

言(ことば)の内に命があった

石川 眞 弓

奨励者紹介[いしかわ・まゆみ]

同志社国際学院初等部・国際部チャプレン

同志社国際学院初等部宗教科教諭

日本キリスト教団京都丸太町教会所属牧師

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

(ヨハネによる福音書 1章1―5節)

「言」なるキリスト

私が毎週通っております京都丸太町教会の礼拝堂正面には、「言」という一文字が描かれたステンドグラスがはめ込まれています。海のように透き通った青の中に白抜きで描かれているのですが、文字と言いましても図案化されていますので、言われてみないと何が書いてあるかは、なかなか気が付きません。見る人によって、いろんな見え方があるのです。私自身は初めてこのステンドグラスを見た時、とっさにキリストの磔刑像を思い浮かべました。作者の意図を直接伺ったわけではありませんので確かなことは言えませんが、このイメージは的を射ていたのではないかと、私なりに考えています。その理由は、ヨハネによる福音書の1章14節にあります。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた」。

このように、ヨハネによる福音書の作者は、神の独り子イエス・キリストのことを、比喩的に「言」と呼んでいるのです。だから、「言」という文字がキリストに見えたのは、正しい直感だったと思っています。

「始まりに賢い者ござる」―宣教師ギュツラフの悲願

ところで、現在この礼拝が行われている建物の名称は「言館」と申しますが、これはヨハネによる福音書1章1節の「初めに言があった」に由来します。我々が今、手にしている聖書は日本聖書協会の『聖書新共同訳』で、1987年に訳されたものですが、それまでにも何度も、実にさまざまな日本語訳が出ていて、初期の頃は旧約・新約の諸書が断片的に訳されているだけの、不完全なものでした。そしてその中でも最も古いのが、『ギュツラフ訳聖書』といって、1837年にできたものです。

「始まりに賢い者ござる。この賢い者 極楽共にござる。この賢い者は極楽。始まりにこの賢い者 極楽共にござる。人はことごとく皆造る。一つも仕事は造らぬ、人は造らぬならば。人の中に命ある、この命は人間の光。この光は暗さに輝く、ただしは世界の暗い人間は 勘弁知らなんだ。」[『ギュツラフ訳 ヨハネによる福音書』日本聖書協会 2006年(奨励者漢字仮名使い変更)]

これは、『ギュツラフ訳聖書』の「ヨハネスの便り 喜び」、つまりヨハネによる福音書で、今日の聖書箇所を取り上げました。現在私たちが読んでいるものと随分違った訳なので、驚かれたことと思います。

ギュツラフはドイツ人宣教師で、語学の天才でしたので、32歳の時にはすでに数カ国語の聖書翻訳を完了していました。この彼がかねてから夢にしていたのが、聖書を日本語に翻訳することでしたが、当時の日本は鎖国の真っ最中で、それは叶わぬ望みでした。

そんな折、ギュツラフが宣教師として住んでいたマカオに、3人の日本人漁師が、漂流民としてやって来ました。彼らの船が日本の近海で遭難してからすでに3年の月日が流れていて、紆余曲折を経てようやくマカオに辿り着いた時だったので、この漁師達は、故郷の土を踏む船に乗れるのは今日か、明日かと、心待ちにしていた時期でした。そこでギュツラフは、進んでこの漂流民達の世話を引き受けて、その間に彼らから日本語を学び、聖書の翻訳を完了してしまおうと考えたのです（この辺りの事情は三浦綾子の『海嶺』という小説に興味深く記されていますので、ご興味のある方はぜひお読みください）。

日本に行かずして3人の日本人に出会えたことは、宣教師のギュツラフにとっては願ってもない幸運でしたが、日本人達にとっては、必ずしも有難い話ではなかっただろうと思われます。何しろ時はキリシタン禁制下の江戸時代で、信者であることが分かり次第、本人はもちろん、家族全員が死刑に処せられました。いくらキリシタンにはなっていないと言っても、もしその經典である聖書の翻訳を手伝ったことがお上に知れたら・・・と思うと、生きた心地がしなかったに違いありません。きっと、翻訳の手伝いなど、本当は断りたい気持ちで一杯だったことでしょう。

しかしながらこの3人には、漂着した土地で捕まって、奴隷として酷使されていた時に代価を払って自分達を救い出し、客人として親切に面倒を見てくれた異国人達に対する、深い感謝と尊敬の念もありました。そこで、帰国の折には聖書の翻訳を手伝ったことは決して他言するまいと申し合わせて、ギュツラフの申し出を受けることにしたわけです。

このように、漂流民達がいわば、決死の覚悟で翻訳に協力してできたのが、『ギュツラフ訳聖書』といわれる『約翰福音之傳』です。

「元始（はじめ）に言霊（ことだま）あり」—J・C・ヘボン訳の完成

その後20年余りも経ってから、この『ギュツラフ訳聖書』を大事に抱えて日本へやって来た、一人の人物がありました。ヘボン式ローマ字の開発で有名な、J・C・ヘボン宣教師です。実は昨年の夏、所用で赴いた仙台の東北学院大学の資料室で、私は思いがけぬ「お宝」に遭遇しました。それは他にもない、J・C・ヘボンが翻訳した『約翰傳福音書』です。ヘボンの翻訳では、同じ今日の聖書箇所が、このようになっています。

「元始（はじめ）に言霊（ことだま）あり 言霊（ことだま）ハ神とともにあり 言霊（ことだま）ハ神なり」。ちなみに、現在我々が使用している日本聖書協会の新共同訳では、「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」となっていますから、内容的には一気に現代語訳と同じレベルまで到達しています。否むしろ、「言霊」という訳語の方が体感的でわかりやすい、という意見もあるくらいです。ギュツラフが日本の土を踏むことはありませんでしたが、何とかして聖書を翻訳し、日本人に伝えたいという彼の情熱はJ・C・ヘボンに受け継がれ、ヘボン自身は後に「明治元（もと）訳」と呼ばれる全聖書の翻訳を敢

行しました。もちろんその後も時代に応じて、聖書はいろいろな人の手で翻訳が繰り返されてきました。大きく分けると文語訳聖書の次には『口語訳聖書』、その次は『聖書 新共同訳』、そしてまた今年は『聖書協会共同訳聖書』が出版される予定です。このような試みは日本だけではなく、世界中、至る所で行われています。

あるロシア語聖書翻訳者の思い出から

今から20年以上昔、私は家族と共に、とあるドイツの学生寮で暮らしていました。ここは当時、州の教会が立てた寮でしたので、世界中から神学や教会音楽を学びたい留学生が集まってきましたが、その中に1軒、モスクワから来たロシア人の家族がありました。この一家はお父さんがロシア語聖書の翻訳に携わる学者さんで、妻子よりも1年以上前にドイツに渡り、しばらく単身で寮生活を送っていました。いつも気難しい表情をして歩いていて、少し取っ付きにくい人だと思っていましたが、話してみると常に家族のことを気に掛けている、優しいお父さんでもありました。「私の妻は料理がとても上手なんですよ」「彼女は幼稚園の先生をしていて、子供と遊ぶのが得意です」「私の一人息子は5歳ですが、身長はもうこんなに高いです」などなど、私は彼からいっぱい妻子の自慢話を聞かされました。

当初はもう少し早く家族が合流する予定だったのに、さまざまな事情で遅くなり、彼の気難しい表情は一層陰しさを増してきました。こんな風でしたから、1年以上も経ってようやく妻子が同じ寮に住めるようになった時は、わざわざ我が家の部屋をノックし、はち切れんばかりの笑顔で2人を紹介してくれたものでした。「やっと家族が一緒になれました!」

しかしながら、妻子と一緒に住めるようになった喜びは喜びとして、現実の生活はなかなか厳しいものです。そもそもこのロシア人学者の男性は、東西ベルリンの壁が崩壊した直後、待ちかねていたように西側ドイツへ流れ込んできた、旧共産圏の人々の1人でした。当時のロシアは経済が破綻していて、大きなパンの塊半分に、労働者1カ月分の給料に相当する値段が付けられたりしていたそうです。従って、ドイツなどの豊かで福祉も充実した国に留学し、奨学金を受け取りながら生活する方が、特に子育てをしている世代には、安全な生き方だったのです。

とは言っても、奨学金はあくまで最低限度の生活を保証してくれる金額であって、そこに個人的な趣味や嗜好、子供のおもちゃ代などを捻出する余裕は、殆んどありません。妻子がやって来た喜びが一通り過ぎ去ると、彼は部屋に引き籠って机に向かうことが多くなり、息子さんはもっぱら、共同のリビングルームに備え付けのテレビに貼りつくようになりました。寮にテレビは1台しかなく、昼間学生が観ることはありませんでしたが留学生の子どもたちは何人かいましたので、たまにチャンネル権で小競り合いになることがありました。それ以外にも、同じ棟内で一緒に遊んでいると、何かとケンカを始めるのが子どもです。

ある時、この息子さんが誕生日だというのにパーティーがないのはおろか、部屋から一步も出してもらえず、ご家庭に少しもお祝いの気配がないので驚いたことがありました。通常、欧米人は日本人が考える以上に誕生日を大切に考えていて、特に子どもの誕生日には友人を大勢招き、盛大にパーティーを開くものです。それなのに一日中、彼らの部屋がひっそりとしているのです。気になった私はそっと部屋をノックし、出て来た奥さんに理由を尋ねました。すると奥さんは「息子への罰なの」と答えました。彼女の説明によると、息子さんは何かの理由で同じ棟に住む南アフリカの女の子とケンカし、女の子が持っていたそ

の子のお父さんの腕時計をバスタブに投げ入れて、壊してしまったのだそうです。その結果、両親は女の子の家庭に腕時計代を弁償せねばならず、誕生日パーティーどころではなくなった、というわけでした。

息子さんがしたことは悪戯としては度が過ぎていますし、確かに厳しく戒めるべき事柄ではありましたが、誕生日パーティーを取りやめ、家庭内でのプレゼントさえ、一切何も手渡さないことにしたのは、要は時計代の弁償で現金がなくなってしまったから、ということであつたと思います。彼らだけではなく、壁の崩壊後東側からやって来た寮生たちは皆、故郷の経済が破綻してドイツとの貨幣価値の違いに苦しんでいましたので、何とか生活費を節約しようと朝早めに食堂へ行き、全寮生の朝食用に置いてあるパン籠の中から、もう1食分多めに取っておく、などの工夫をしていました。そうすると1人最低2個は取り分があるはずのものが、少し寝坊な寮生が遅れて食堂に来た頃にはパン籠が空っぽ、ということも度々で、寮内の学生会議で問題になったこともありました。同じ地球上に生まれて、同じように勉学を志して懸命に生きているのに、祖国という置かれた環境の違いで、よその国で後ろ指を指されながら生活しなければならないのは、さぞかし悔しかったろうと想像します。

「キリストの命」を探る聖書翻訳

聖書翻訳から少し話題が逸れましたが、そもそも古代オリエント社会の人類が神と出会い、聖書という書物を生み出してから、しばらくの間それは、聖職者と呼ばれる人々の占有物でした。しかし宗教改革者マルティン・ルターが聖書を母国語に翻訳し、すべての人が自分の国の言葉で聖書を読める道を拓いてからというもの、世界中至る所で聖書翻訳という仕事が行われることになりました。聖書の翻訳は個人が一朝一夕でできる技ではなく、何十人もの著者がそれぞれに苦勞して原文に当たり、文章を書いて推敲し、それをまた何十人もの人々が集まって何度も会議を重ねて議論を交わし、ああでもない、こうでもないという試行錯誤の上訂正し、それを何年もの月日をかけて繰り返し、ようやく日の目を見るものです。だから、全体としては歴史に残る大事業だと言っても、過言ではないでしょう。

しかしながら、執筆している一人ひとりはいくまでも普通の人間であって、スーパーマンではありません。我が家の隣人であつたロシア人男性のように、家族と離れて暮らしていれば気持ちが沈み、表情も陰しくなるでしょうし、一緒に暮らし始めたら暮らし始めたで、子どもの粗相が計算外の大量出費を生み、意気消沈の原因となります。またある時私は、彼が慣れない外国の歯医者に掛かったせいで顔が異常に腫れ上がり、別人のようになって帰宅したのも見たことがあります。多少の奨学金が出るとはいえ、一体こんな思いをしてまで住み慣れた故郷を離れ、異国の地で学ぶ意味があるのだろうか、と他人事（ひとごと）ながら真剣に考えたものでした。

でも、今ならその答えは、はっきりとわかります。「それでも、意味がある」のです。聖書翻訳に携わっている人間が別段人格者であるわけではなく、健康で非の打ち所の無い生活を送っているわけでもありません。むしろ、手掛けている世界が非日常であればあるほど、夥しい資料や蔵書類に生活圏を阻まれるなど日常生活に支障をきたすことも多く、家族に迷惑が掛かることが増えるかも知れません。にもかかわらず、多くの人々が聖書の言葉を翻訳し、その言葉から何かを聞こう、悟ろうとするのは、そこにキリストの命がある、と信じているからです。

未熟な人間の言葉が語る「至高の言葉」

私たち人間が語る「言葉」には、未熟な部分が多く含まれていて、しばしば核心が伝えきれていなかったり、誤解を生んでしまったりすることがあります。それは、たとえば今日のように礼拝で牧師がメッセージを語る時や、聖書そのものを読み上げている時でさえ、起こり得る出来事です。聖書が何十年に一度、新しい翻訳を試みられるのも、つまりは人間の言葉に完璧というものがなく、繰り返し反省しては、新しく生み出していかなければならない運命にあるからです。

にもかかわらず、我々はあえて語ります。語らないわけにはいきません。なぜなら聖書に「言（ことば）は神であった」と記されている以上、至高の言葉を見つめ、それを目指して語ろうとする営みは決して無駄ではない、と考えるからです。

ところで、「不言実行」という言葉があります。あれこれ言わず、黙ってなすべきことを実行することの大切さを表す言葉です。確かに聖書の中にも、「子たちよ、言葉や口先だけではなく、行いをもって誠実に愛し合おう」（ヨハネの手紙一3章18節）と書かれていますので、行いさえ良ければ言葉は要らないのだ、という考え方も出てきそうです。

けれども、人を励ましたり、慰めたりできるのは、言葉のもつ偉大な力です。逆に人を嘲ったり、貶（おとし）めたりして深く傷つけるのも、言葉のもつ恐ろしい力です。言葉は人を生かしもするし、殺しもする、両刃の剣なのです。ならば、私たちは人に優しさを伝え、生かしていけるような言葉のみを積極的に選んで、語っていくべきではないでしょうか。

聖書の中には一貫して「人間は一人ひとりが神に愛されている、貴重な存在である」ということが語られています。通常、牧師と呼ばれる人々は、そのメッセージをある時はストレートに、ある時はオブラートに包んで、礼拝の中で伝えています。そしてその陰では、先ほどお話したロシア人男性のような無数の名もなき翻訳者が、己（おの）が人生と家族の生活を賭して、メッセージの根幹を支えていたりするのです。

どうか、聖書を「単に宗教家が好むだけの取っ付きにくい書物」と考えず、じっくり味わって、ご自分のものにしていきたいと思います。そして、そこで語られる一つ一つの言葉の内に秘められた命に生かされる喜びを、ぜひ隣人とも分かち合ってくださいることを願っています。